

第5表 本堂(含本殿)

	合計	木造伝統	コンクリ伝統	新式	普通の家	ビル一角	祠その他
旧市内	393 (100%)	208 (53)	44 (11)	75 (19)	53 (13)	10 (3)	3 (1)
中間部	69 (100%)	47 (68)	8 (12)	8 (12)	5 (7)	0 (0)	1 (1)
周辺部	135 (100%)	88 (65)	15 (11)	17 (13)	15 (11)	0 (0)	0 (0)
合計	597 (100%)	343 (57)	67 (11)	100 (17)	73 (12)	10 (2)	5 (1)

第6表 門 (寺院のみ)

	合計	屋根付門	普通の門	なし
旧市内	374 (100%)	76 (20)	236 (63)	62 (17)
中間部	59 (100%)	16 (27)	35 (59)	8 (14)
周辺部	120 (100%)	47 (39)	61 (50)	12 (11)
合計	553 (100%)	139 (25)	332 (60)	82 (15)

第7表 前面の様子 (500坪以上の寺院)

	合計	a	b	c
旧市内	160 (100%)	54 (34)	43 (27)	63 (39)
中間部	42 (100%)	21 (50)	5 (12)	16 (38)
周辺部	102 (100%)	89 (87)	7 (7)	6 (6)
合計	304 (100%)	164 (54)	55 (18)	85 (28)

- a. 前面がほとんど道路に接する
- b. 半分ほど
- c. ほとんど道路に出ない(入口程度)

阿武隈山地の牧草地立地 に関する地理学的考察

武田(渡辺)むつみ

本論文は福島県東部に位置する阿武隈山地、特に中央部を流れる大滝根川-夏井川以北の北阿武隈山地を調査地域として、近年の畜産振興に伴ない本山地でも造成が進んできている牧草地について、その立地の主に自然的(特に地形)側面からの考察を試みることを目的とした。

そこで本稿はまず第一章で阿武隈山地の自然環境としての地形をとりあげ、地質とともにその系統的把握を行なった。続く第二章では地域の牧草地分布の諸面、すなわち馬飼養時代の野草地分布、現在の土地利用と牧草地分布、さらに大規模牧草地の開発と地域の農業的総合開発にふれ、これら

と主に地形との関連に重点をおきながら考察を進めた。第三章では、本地域の中からその地域的特色をよく示していると思われるサンプル地域として北部の飯館村をとりあげ、その地形を中心として他の自然条件、人文条件も加味しながら、本村における牧草地立地をできる限り総合的に把握することを試みた。本稿では近年の大きな土地利用変化の一つとして牧草地の開発をとらえ、特にその地形面からの考察を行なったが、牧草地の開発には多くの人文的条件が働いており、これらを全く捨象することはもちろん不可能である。そこでこれらをも考慮に入れ、本山地の地域的特色も考えあわせながら記述を進めていった。

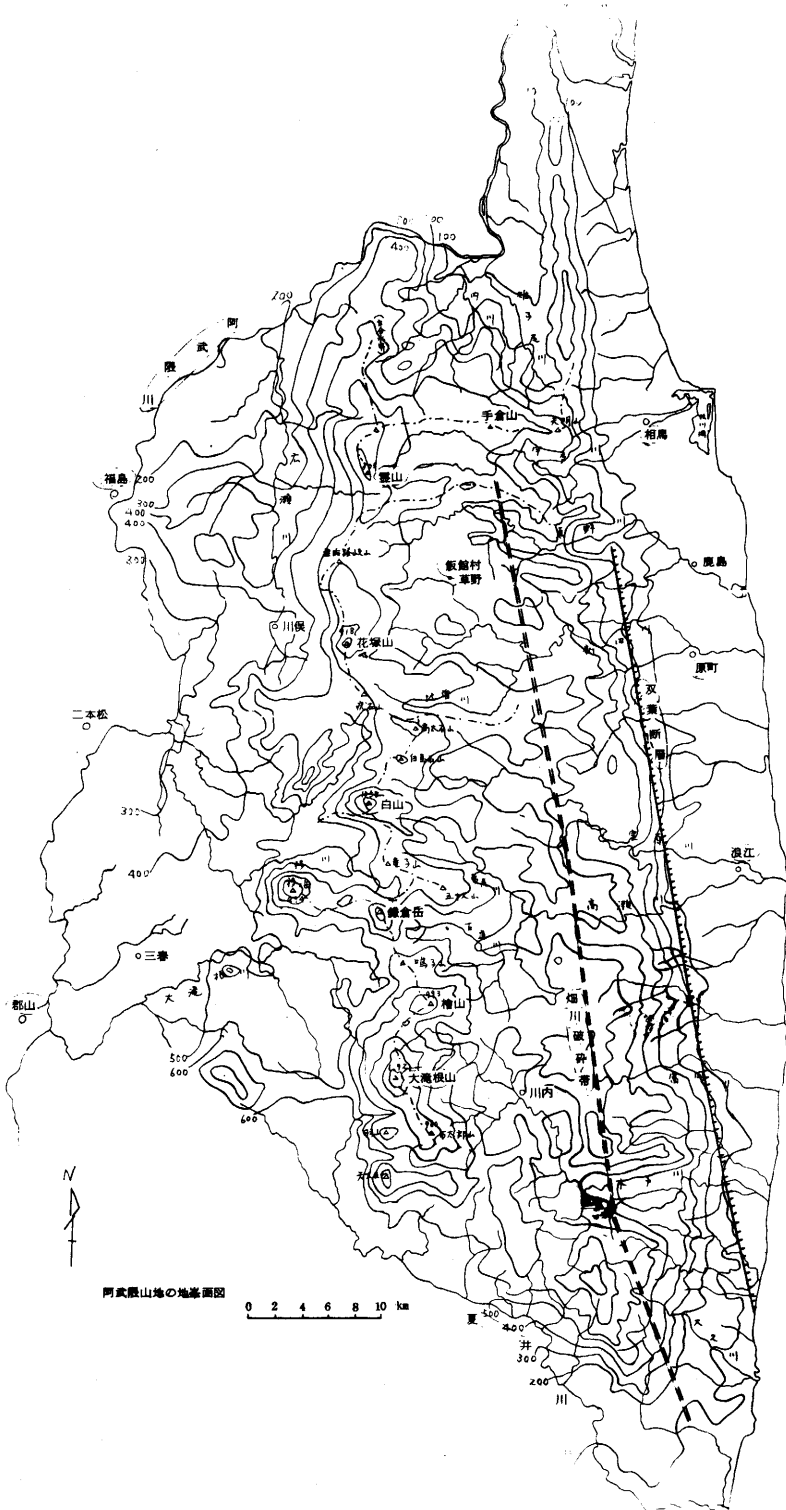
次に以上の過程を通じて明らかにしえたと思われる事実を要約して述べる。

1) 北阿武隈山地は西の阿武隈川に沿う盆地群と東の太平洋岸丘陵地にはさまれた紡錘形の高原性山地であり、主に古生代末～中生代にかけて進入したと思われる花崗岩からなっている。筆者作成の切峯面図からも明らかのように、山地の西からほぼ $\frac{1}{3}$ のところには800～1,100mの残丘群が南北に並び、主分水界を形成している。その東西には小起伏面が分布するが、その形態は各々異なっている。すなわち分水界の西側では海拔約600m以下のほぼ連続した小起伏の侵食平坦面が、山麓階状の地形を呈しながら阿武隈河谷へむかって高度を減じているのに対し、分水界の東側では分水界の残丘群と畑川破碎帯にはさまれて、盆地状の平坦面とそれを囲むなだらかな山地の組みあわせによる一連の老年地形が、破碎帯付近の遷急点に守られてその上流部に保存されている(第1図)。主な河川と山稜の縦断面図を描いてみると、畑川破碎帯は山稜高度に影響を与えておらず、ゆえにこの老年地形は破碎帯活動後、双葉断層活動前の第三紀(中新世より前の)に形成されたものとみられる。破碎帯と双葉断層間は河川の下刻が進み、大起伏の山地地形を示し、断層を境に太平洋岸の丘陵地帯に続いている。

2) 阿武隈山地では古代、中世の時代から旧藩のもとで山地に広がる野草地や山林を利用して、馬の自由放牧が盛んに行なわれてきた。この種の野草地は分水界周辺およびその東部地域に広く分布していたが、これは比較的緩斜地の多い地形、冷涼な気候とそれに伴う耕種農業の不安定さ、耕地の狭さと広い林野の存在、加えて旧藩の馬産奨励などのためと考えられる。馬産は戦後急速に衰退したが、かわって肉用牛、乳用牛の飼養が盛んになり、近年その飼料基盤として比較的開発の容易な未利用地であるこれらの野草地が注目されてきた。また、畜産振興に際し、家畜飼養の伝統もみのがすことはできないであろう。

3) 阿武隈山系地域は福島県の牧草地の約 $\frac{2}{3}$ 、大家畜飼養の約 $\frac{1}{2}$ を占める畜産の盛んな地域である。地域の土地利用を地形との関連で見ると、およそ谷底平野の水田、山麓緩斜面の畑、北西部丘陵斜面の桑、急斜面の林地となっている。牧草地は小起伏地域の丘陵状斜面、山腹及び山麓の緩傾斜地などに立地するが、現在のところ数ha～数10haの小規模なものが多く、個人の里山利用、あるいは牧野組合の土地の利用が多い。地域的には分水界周辺および分水界と畑川破碎帯にはさまれた山地東部の老年地形地域に多く分布している。

4) 阿武隈山系地域の農業的総合開発に伴ないいくつかの大規模牧草地の開発が行なわれてきているがこれらはみな山地あるいは丘陵地の頂稜部を利用している。これは従来の土地利用景観からみるとかなり特異な現象と思われるが、老年期的地形を示す本山地においては比較的まとまった緩斜地が得ら



阿武隈山地の地形図

0 2 4 6 8 10 km

れやすいこと、買収に手間のかかる個人有地を避けること、以前の野草地の利用が多いことなどの理由によるものと考えられる。しかし、頂稜部を草地へ転換するには土壤保全、水資源確保など種々の問題がある。

5) 飯館村は阿武隈山地北部、分水界の東側に位置しており、主に花崗岩類からなる高原上の盆地状の老年地形地域にあたる。筆者はその地形を狭長な谷底平野、これとスムーズに移化する山麓緩斜面(凸型、凹型)、山頂および山腹緩斜面、急斜面に分類したが、本村をはじめ本地域に特徴的なのは断面が凹型(谷型)の堆積性山麓緩斜面である。これは直接河川の侵食をうけて形成された面ではなく、局部的な侵食基準面に従い細流侵食、マスウエースティングなどあらゆる種類の営力の合作によりつくられた面と考えられ、風化の進みやすい花崗岩地域に分布が広い。

これを土地利用とあわせて考えると村面積の80%以上を占める林野が急斜面、山腹及び山麓緩斜面と山麓緩斜面の一部(特に凸型)、水田が谷底平野、畑が比較的傾斜がゆるく集落に近い山麓緩斜面、桑園が村の北東部の山麓緩斜面の分布とよく一致している。牧草地は主に山麓緩斜面に分布するが、このうち数ha程度の小規模なもの、あるいは採草利用のものは比較的傾斜がゆるく集落に近い前述の凹型山麓緩斜面に多く、大規模なもの、あるいは放牧利用のものは集落からも遠く、比較的急傾斜な凹型及び凸型の山麓緩斜面に多い。しかし、傾斜変換線より上部の急斜面にはほとんど分布していない。これまでは主に個人の里山開発及び牧野利用による小規模な草地開発が多かったが、近年省力化の要請、村の指導、不耕起まきの普及などから放牧地が増加してきており、また総合開発に関連した大規模草地の造成も進んできた。そこで牧草地もより集落から遠く、急傾斜な地域へと開発がおよんできている。

6) 飯館村は耕地面積は12.8%にすぎないが、農家率は78.9%を示し、またそのうち80%以上が専業及び第一種兼業農家であり、山地に位置する農業を主産業とした村といえる。近年人口流出が進み、社会的にも経済的にも今日の都市化、工業化の波からとり残され、後進的色彩が強い。ところがこのような状態にある本村で、ここ数年来顕著な土地利用変化として牧草地造成がみられるようになってきた。これは里山的地形、冷涼な気候、それに伴う不安定な耕種農業などの自然条件、また畜産の伝統、広い未利用林野の存在、地形、交通位置などから他産業未発達の本村における農業発展の為に規模拡大の必要性、そこに食生活高度化に伴う畜産物需要の増大などの条件が重なり、未利用林野の開発による畜産物供給地としての発展が考えられるようになった結果と思われる。

そしてこの傾向は分水界と畑川破碎帯—双葉断層崖間の山地にはさまれた海拔500m以上の老年地形地域である分水界東側地域に共通であり、ここは分水界西側の阿武隈河谷に開かれた地域に対し、比較的閉鎖的な孤立した山村地域となっている。飯館村はこの東側地域の一つの典型とみられ、いわゆる山村地域としての阿武隈山系地域の特色を端的に示している村といえると思う。

7) 飯館村をはじめ阿武隈山系地域のめざす畜産は草地に基礎をおく草地畜産であり、これは北海道、青森、岩手から続く一系譜の延長とみられる。これには広い開発可能な未利用地の存在が前提となるが、本地域はこの条件に適合しており、分水界周辺及びその東部の老年地形地域の山地、丘陵地の頂稜部あるいは堆積性緩斜面を中心にその展開が始まっているものと思われる。一方、土地との結びつきやすい都市近郊の畜産地域の拡大もみられ、本地域はその接点地域とも考えられる。しかし、や

はりここでの畜産の基軸は広い未利用林野を生かした草地畜産であろう。これは今日の我国をとりまく飼料問題，食糧自給問題などからみても，また国土の有効利用の面からみても非常に望ましいことと思われ，各地域に即した開発の遂行が望まれる。

居住環境評価における愛着意識

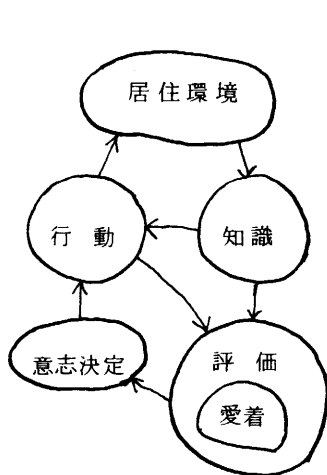
I. 序

吉田晶子

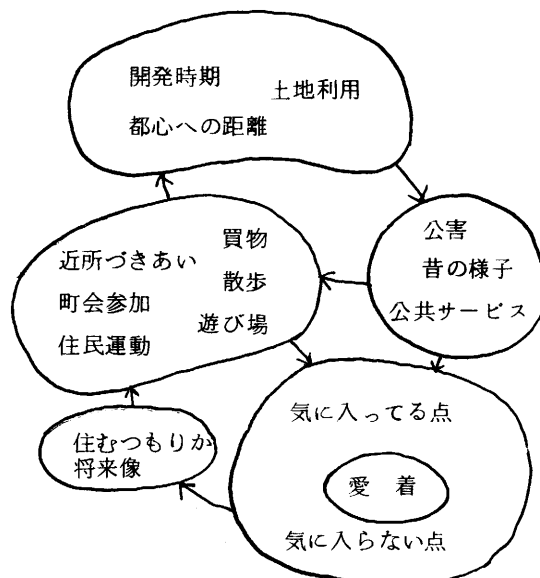
現代の都会の人々は，住んでいる町に対し，どのような思いを抱いているのであろうか。それは様々な感情の複雑にからまったものであるのだろうが，その中で“愛着”の意識とはどのようなものか，どのように育つのか，さらに，町づくり運動のようなインパクトに対してどのように働くのか。このような点を問題意識とし，東京の住宅地を例として研究を進めた。このテーマをとりあげたのはまた，東京が愛着のもてる町であって欲しいという素朴な気持からでもある。

II. 研究の枠組

本論文では，愛着意識を人間—環境系の脈絡においてとらえていく。居住環境と人間との関係を考察してみると，人間は，環境を認知し，知識を得，行動を通して働きかけている。さらに，知識・行動から環境を評価するというかかわりを持っている。その居住環境評価のかなり深層に位置する意識の一つに，愛着を感じる意識があると考えられる。この関係を1図に示す。このような愛着意識の実態および形成過程を把握することにより，人間—環境のかかわりの方式の一面を解明することは，本研究



1 図



2 図